中国連携

辞書に結実した東亜同文書院の偉業

中日大辞典編纂所

概要

愛知大学の前身である東亜同文書院の華語研究会では、１９３３年ごろから華日辞典編集のための原稿カード作りが行われていた。敗戦まで１４万のカードが作成されたが、これらの成果物は中華民国に接収されてしまった。愛知大学創立後、本間喜一学長は鈴木擇郎教授（同文書院、華語研究会の責任者）に相談し、原稿カードの返還を中華人民共和国に要請。働きかけが実り、カードは１９５４年９月に返還された。関係者が協議の結果、このカードは愛知大学に付託されることになり、翌年４月に華日辞典編纂処が開設、「中日大辞典」編纂の歴史が始まった。しかし中国語の変化も激しく、カードは一から作成し直すことに。１３年の年月をかけ、１９６８年、愛知大学「中日大辞典」が刊行された。

１３年をかけた初版刊行の労苦

初版「中日大辞典」は、本学の創立２０周年の記念刊行物として刊行された。我が国初の本格的中国語辞典として大きな評価を得、出版の翌年には中日文化賞を授与された。

刊行までの華日辞典編纂処（編集委員長鈴木擇郎、編集主幹内山雅夫ら）の労苦はもちろん、本間名誉学長も刊行実現のために労苦を尽くされた。大学とは別機関の「華日辞典刊行会」を設立し、刊行を見通して印刷費原資の確保のために奔走された。

なおカードの返還には、文学者、文字学者、歴史学者として著名な郭沫若先生に多大なるご尽力をいただいた。中国初の訪日学術代表団が来日した時には、郭沫若先生を招待したが、これが本学における国際交流事業の端緒となったことも見逃せない。

文革と改革開放を経た第２版

初版刊行後、辞書編纂処は一旦解散したが、１９６６年から始まった文化大革命により、多数の新たな語彙が登場し、対応を迫られた。郭先生の尽力により、文革さなかの１９７３年、辞書編集関係者による愛知大学学術代表団が訪中し、南開大学・北京大学・復旦大学で「中日大辞典」座談会を開催。種々の指摘や提案を受けたことを契機に、辞典編纂処の再開が決定された。

その後、中国では文化大革命を経て改革開放政策を導入、次々と新語が登場した。こ

のため内容の全面的見直しを進めた結果、10年以上の歳月を費やし1986年に大修館書店より第2版が、さらに翌87年、簡化字総表などの追加訂正による増補第2版が刊行された。

なお、1994年には辞書カード返還40周年を記念して中国日本友好協会に贈った1000冊を含め、初版以来、5000冊が中国に贈呈された。

中日大辞典編纂所と改称

2003年に名古屋校舎（現みよし市）に編纂処が移転、中日大辞典編纂所と改称。辞典内容の見直しのため、中日大辞典新版編集委員会が発足した。編集委員長に安部悟、編集主幹に今泉潤太郎が就任し、第3版の編集が開始され、2010年2月、大学創立60周年記念として、20年ぶりに第3版「中日大辞典」が発行された。

最新の研究結果を取り入れ、内容の全面的な改訂がなされた。同窓生がボランティアとして献身的に協力し、多数の新語資料を提供したことも特筆に値する。

第3版の主な特徴

① 収録親字数は1万4000。親文字には繁体字（旧体字）・異体字を併記。
② 一般語彙はもちろん、文語・古白話・方言・成語・慣用句から新語まで、幅広く豊富に収録している。
③ 語釈は正確で、例文は常用される典型的なものを多数収録。語釈・例文中の多音字には適宜、読み（ピンイン）を示す。
④ 文法説明を豊富に取り入れ、同義語・反義語などを示すと共に、語の硬軟・褒貶などにも十分に配慮。
⑤ 中国特有の百科項目もふんだんに収録し、それぞれに詳細な解説を施す。
⑥ 部首索引、日本語索引、付録13点。

これからの姿

電子化と用途別の2つの将来像

電子辞書や電子書籍の普及が本格化し、辞書の世界は変革の時代を迎えている。「中日大辞典」も例外ではなく、電子化も一つの将来像となるであろう。

「中日大辞典」の大きな特長に、もともと非常に多くの語彙を収録する「百科事典的」という要素がある。すなわち、多様な検索を容易にするコーパス（コンピュータによる検索が可能な大量の言語データ）化のメリットが大きい。

また、紙媒体では紙面の制約で削除されていた語彙も、デジタル化すれば無限大に収

録が可能となる。さらに第1版・第2版も含めた「串刺し検索」も可能になれば、その時代ごとに即した語彙を選ぶことも可能となる。

それとは逆のアプローチとして、編纂所の今までの蓄積を活用し、例えば「古典」「汎用」「表現」といった、用途別の「中日大辞典」の登場を期待する声もある。こちらも一つの将来像として検討したい。

〔注〕愛大『同窓会報』NO.106（二〇一〇年六月一日）所載。

知を愛し人を育み

―愛知大学物語―

（八八～九二、一〇〇、一〇一）

和木康光

宿願の『中日大辞典』

愛知大学が『中日大辞典』の編纂にかかったのは一九五五（昭和三十）年からだったが、その源流は一九三三（昭和八）年頃にまでさかのぼる。その頃、東亜同文書院で『華日辞典』を編纂するため原稿カードの作成を始めた。その作業は一九四五（昭和二十）年半ばまでにカード約十四万語を集め、整理も済ませて出版準備をするまでに至った。だが、ここで終戦。原稿カードは中国側に接収されることになってしまった。「くれぐれも散逸しないように」…学長だった本間ら大学関係者はこれを大きな木箱五つに入れて保管を依頼し、心を残しながら引き揚げた。

日本に引き揚げた東亜同文書院大学を中心とした学生、教授によって愛知大学が創立された。しかし、『華日辞典』の編纂は途絶えたまま。いつしか八年が経ってしまった。本間はこの途絶を惜しんで、当時の関係者であった小岩井浄、鈴木擇郎らの教授と相談、辞典原稿を何とか返してもらい出版しようと諮り、中国側に返還を申し出ることにした。

「接収された東亜同文書院大学で手がけていた華語辞典の原稿を改正し、中日文化交流に使用したいから原稿資料カードを返してほしい」

日中友好協会を通じて中華人民共和国政務院科学委員長の郭沫若らに連絡した。すると、ややしばらくして中国側から反応があった。

「あり場所を調べるために手間どったが保存されていると分かった。返還を正式に申請するように」

カード類は中国内戦などで散逸しているのではないか、と半ば諦めかけていた本間らの喜びはひとしおだった。さっそく手続きをし、原稿カードを取り戻した。それが一九五四（昭和二十九）年十二月。これをうけて愛知大学では、簡略文字など激変する戦後の中国語の変化を取り入れながら『中日大辞典』の編纂事業を行うことにし、十余年を経て一九六八（昭和四十三）年、『中日大辞典』初版が出版されたのだった。

『中日大辞典』は、一定の中国語の学力をもつ日本人が中国の新聞・雑誌・一般書を読む場合に役立つ辞書、いわば『広辞苑』の中国語版を目指したとあって、中国の政経時事・科学技術用語から方言・成語・俗語・諺語・古語に及ぶ語彙（ごい）十三万余が取り上げられ、そのボリュームもＢ６判、総ページ二千百二十三ページにおよぶ大冊。

こうした本格的な中国語関係の辞典刊行に反響は大きく、画期的な中国語辞典として高く評価されることになった。

「語彙は政治、科学用語から方言、成語、諺、古語に及び…読者に親切な編集である」（『朝日ジャーナル』）

「この辞典の出版によって、日本は中国に関して世界の学界に誇りうる金字塔を建てたといっても過言ではあるまい」（毎日新聞記事）

マスコミにも好評だった。中日新聞社は、その文化的意義を認めて、一九六八（昭和四十三）年度中日文化賞を『中日大辞典』編集グループに贈った。

国際的な評価も高かった。

中国カード返還にかかわった一人、中国科学院長・郭沫若（かくまつじゃく）は、辞典編纂に励む愛知大学を激励するため「激濁揚清」という書をしたため、辞典編纂中の一九六六（昭和四十一）年、折から訪中した豊橋市長であり愛知大学理事でもある河合陸郎（ろくろう）に托した。それは「濁ヲ激シテ清ヲ揚グ」―語彙の大海から基準となるべき詞語を採る―という意を表したもので、中国側でも『中日大辞典』への期待が高いことが知られていた。

大学は中日友好協会へ、これまでの好意に感謝の意をこめて千二百部贈呈したが、これが中国各地へ送られ、広く利用されることになった。

辞書は中国以外にも、アジア研究で著名な世界各国の大学の図書館に贈呈したが、これらの大学でも学究者の間で極めて有用な中国文献資料として注目された。〝アイチダイガク〟の名は国際的に広まり、掛値なしに〝世界に誇る『中日大辞典』〟のレッテルが張られることになった。

『中日大辞典』はその後、増訂版が出されていく。

改訂版編集に一応の目処がついたのは改訂作業開始後、十年の歳月が経過した一九八四（昭和五十九）年のこと。一九八六（昭和六十一）年二月に『中日大辞典　増訂版』が誕生した。増訂版は本文二千五百二十ページ、索引を加えると総ページ数二千七百六十五ページと厚みを増した。

増訂版は一万七千部刷った。ところが売れ足は速く、一年のうちに残部三千部を切る、まさに「飛ぶような勢い」に、翌年、一万部増刷した。

こうして多くの研究者・実務家・学生に長年愛用されてきたが、日中関係の進展とともに国内外で多種多様な辞典が見られるようになる中、さらに『中日大辞典』のグレードアップを図って、名古屋（三好）校舎に「中日大辞典編纂所」を移して、第三版の編纂に取り組んだ。

そして一九八七（昭和六十二）年刊行の「増訂第二版」から数えて二十数年ぶりの改訂として、二〇一〇（平成二十二）年二月に「第三版」が刊行された。

「第三版」では、新語の追録やフォントをより読みやすいものに変更するなど、より使い良い辞書とされている。

この「第三版」の刊行について、神戸市外国語大学学術情報センター（図書館）のホームページにはこんな記述がされている。

「この『愛知大学　中日大辞典』は、中国語―日本語辞典では数少ない、普通話や方言だけでなく文語や古語も引くことができる辞典であるため、多くの研究者・実務家・学生の方々に長年愛用されています。」

「この『愛知大学　中日大辞典』は、中国語と中国を、より広く深く知りそして学ぶことができる、最良の辞書の一つです。」

「現在、大学等で中国語を学んでいる学生さん、そして仕事で中国語の読み書き会話や翻訳等をしておられる方には、ぜひお手元に一冊『愛知大学　中日大辞典　第三版』を持っておかれることをお勧めします。中国語のスキルアップや仕事に、大いに役立つ一冊です。」

これまた、的確な評価のもと『中日大辞典』の今日的な存在意義をしっかり捉えた紹介ではなかろうか。

『中日大辞典』の出版は、愛知大学の中国研究の業績において一つの金字塔をなすものだが、大学史上、その後の国際交流に大きく扉を開き、画期的な進展をみせていく契機となるものでもあった。

「資料カードを快く返してくれたうえ、その後の資料提供など中国の好意に感謝せざるをえない。辞典編集のために約五千万円の経費がかかったが、これを辞典の収益でまかなうつもりはない。辞典の売り上げは出版社の経費を差し引き、すべてを日中友好基金にすることを大学として決めた」

一九六八（昭和四十三）年二月八日、豊橋校舎で『中日大辞典』出版披露のセレモニーを開いた時、本間名誉学長が発表したこの〝基金〟は、日本と中国の交流などに役立てられることになる。

大学では、その後、郭沫若を通じて、中国側に愛知大学学術代表団の派遣を要望するなど、交流の実現に努めるが、その努力は一九七二（昭和四十七）年九月に田中角栄首相が訪中し、日中国交正常化がされることとなって実現を見る。

翌一九七三（昭和四十八）年、中国側から「南開・北京・復旦三大学に愛知大学代表団を受け入れる」という招聘状が届いた。愛知大学では辞典刊行委員会で鈴木擇郎団長はじめ四名の派遣を決定し、三週間に及んで訪中した。

責任校として世話に当たった天津の南開大学では、二日間にわたって『中日大辞典』に関する座談会が行われた。上海の復旦大学でも、語釈、用例などについて熱のこもった座談会が持たれ、辞典に対する評価と共に、さらに充実した内容とするための共同作業など、これからの辞典改訂のめどにも明かりを見ることができた。

この愛知大学学術代表団の訪中は、中国側からも高い関心が寄せられた。

郭沫若を表敬訪問し謝辞を述べる機会もあったが、人民日報の国際面は「友好を深める日本学者」としてその会見を写真入りで報道した。中国の中央紙や地方紙も、訪中を終えた記者会見記事で『中日大辞典』と愛知大学の学術交流について大きく紙面を割いた。

この代表団は愛知大学が海外に派遣する最初の代表団であった。だが、これはまた、その後一九八〇年代から始まる愛知大学の本格的な国際交流の幕開けと位置づけられる出来事でもあった。

大学代表団が南開大学等を訪問したのを契機に、中国の各大学、機関との交流が活発化して、南開大学・北京語言学院から交換教員が愛知大学に派遣されることになり、中国人教員が辞典編集に協力する体制もつくられた。

中国の大学と協定が結ばれることにもなった。

将来計画の検討

本間は、前年の一九八七（昭和六十二）年五月九日、九十五歳で死去。大学では六月、「元学長大学葬」を執行。その他界を悼んだ。

顧みれば、三好町が愛知大学誘致の意思表示をしてから半年、一九七七（昭和五十二）年十二月の評議会には、土地購入に関して賛否で紛糾するなか、本間は名誉学長として特別に出席して審議に加わり、その結果、三好町の土地購入に関しての意思決定がなされた。こうして土地入手の最終決断にまで持っていった本間だったが、この昭和六十三年の名古屋校舎（三好）のお披露目を見ることはなかった。

しかし、晩年の本間は、なお愛知大学に心をかけていた。

「僕はハレー彗星をもう一度見てからでないと死なないよ」

本間は、生前一九七六（昭和五十一）年初夏のとき、十年後の一九八六（昭和六十一）年に接近する機会を期して、そう言った。

約七十六年で地球を周回するというハレー彗星がもっとも接近したのは一九一〇（明治四十三）年の五月十九日、それを見た本間は、二回目のハレー彗星望見を夢見たのだった。それは、老いてなお矍鑠（かくしゃく）として人生を謳歌する気概に満ちていた。

本間は、この言葉どおりに、一九八六（昭和六十一）年に接近したハレー彗星に望み、その希望を果たした。

しかし、このころは本間もさすがに行動に制約を感ずるようになっていた。

折から一九八六（昭和六十一）年四月、『中日大辞典』の増訂版が十七年ぶりに刊行され、その出版記念会が開かれた。

だが、本間は体調優れず、欠席やむなく長女の晟子に代理出席させた。その晟子は、今泉編纂所長に宛ててしたためたお祝いの書簡の最後に、添え書きのかたちで本間の現況をこう記した。

「私の見てます所、父はこのようにみえます。

老驥伏櫪　志在千里（曹操）」

引用された〈曹操〉のこの句は、三国志の英雄、魏の曹操が著わした『歩出夏門行』

から採った「老驥伏櫪志在千里　烈士暮年壮心不已」（老驥（ろうき）櫪（れき）ニ伏シテ志千里ニ在リ　烈士ノ暮年壮心已（や）マズ）。

その表す意は、老いた駿馬（しゅんめ）は飼葉桶につながれていても千里を走る気持ちに変わりはないし、節義の固い志士は年をとっても意気盛んな心は抑えられない…。

晟子は、本間が業を成し遂げた将に晩年になっても元気の衰えない様を中国英雄の言葉に仮託したのだった。

しかし、愛知大学に燃やし尽くした使命感はいつか尽きる。

愛知大学は創立の人を喪い、三好に新天地を得て、ここに時代を画するエポックともなったのであった。

〔注〕中部経済新聞二〇一一年四月一日より連載の「愛知大学物語」より抜粋。

「中日大辞典」ＤＢ方式へ

愛知大・発刊５０年　来年にも公開

～ＩＴ分野の新語など随時更新～

愛知大学の「中日大辞典」が今年で発刊５０年を迎える。本格的な中国語辞書として研究者や学生に使われてきたが、「紙の辞書」は現在の第３版が最後になりそうだ。情報を随時更新できるデータベース方式に完全移行する準備が進んでいる。

中日大辞典編纂所所長の安部悟教授＝現代中国学部長＝が。大変身を決めた理由を話す。

「ほぼ２０年間隔で新版を出してきた。第３版刊行から１０年もたってないのに、ＩＴ分野などの新語が恐ろしいスピードで増えている。電子辞書でも対応は無理。データベース方式ならいつでも情報を追加できる」

準備は第３版刊行２年後の２０１２年に始まった。編纂所の研究紀要「日中語彙研究」を大学ウェブサイト限定のデジタル版として創刊した。辞典編纂にかかわる現代中国学部の日本人・中国人の教員や、愛知大から中国に戻った元教員らが、データベース構築に直結する研究成果を発表してきた。

「文化大革命時代の用語を豊富に収録した増訂第２版と最新の第３版を踏まえたデータベースがほぼ完成している」と安部所長。大学ウェブサイトからアクセスし、誰でも無料で使えるようにしたいという。早ければ来年にも公開されそうだ。

「中日大辞典」の発端は、中国・上海にあった東亜同文書院大学（愛知大の前身）が、まだ専門学校だった１９３３年に手がけた幻の「華日辞典」にさかのぼる。４５年の敗戦で接収された辞書カードが、５４年に愛知大に戻り、６８年に「中日大辞典」が誕生するまでの経緯は、戦後の日中交流を象徴する物語として語り継がれている。

物語の主人公は、当初から一貫して編集責任者を務め「中日大辞典」を完成させた鈴木拓郎教授、辞書カード返還をいちはやく提起し実現させた本間喜一初代学長。そして、中国政府の要職にあってカード返還とその後の学術交流を促した知日派の文人政治家、郭沫若だ。

「激濁揚清」。郭沫若が愛知大に贈った文字が、鈴木の遺影とともに辞典編纂所に掲げてある。「濁を激して清を揚ぐ」。言葉の海に言葉を探る辞書編集をたたえ、日中関係の将来を見据える言葉だといえる。

初版、増訂第２版、第３版の総発行部数は約１５万冊。創刊経緯を踏まえ、中国政

府や中日友好協会、中国の大学などに1万冊近くを贈ってきた。

安部所長は話す。「中日大辞典は、日中の若者が学んだ東亜同文書院の流れをくむ愛知大学を代表する企画。電子辞書を学生に推奨する大学が増え、もはや紙の辞書の時代ではなくなった。今後は、データベースの中で中日大辞典が生き続ける」

学術交流のさきがけ

今泉潤太郎名誉教授

初版から第3版まで編集にかかわった今泉潤太郎・愛知大名誉教授に聞いた。

◆

「中日大辞典」は60年代後半から90年代にかけて中国でもかなりの部数が出回り、幅広く活用された。日本語を学ぶためだけではなかった。日本の明治大正期にあたる清末民初の庶民の言葉、経済や政治の用語など、中国の辞典に収録されていない中国語が豊富に載っていたからだ。東亜同文書院時代の蓄積とイデオロギーにとらわれない編集方針のたまものだった。文化大革命のさなか、大学間の学術交流のさきがけとなり、欧米の学界にも愛知大学の存在を知らしめた。

「中日大辞典」は愛知大学の顔だった。

〔注〕朝日新聞二〇一八年二月七日朝刊所載。

中日大辞典を巡る人々

石田卓生（愛知大学非常勤講師）

第1回　グローバル化の中の日本と中国

一昔前、国際化という言葉がもてはやされたが、近頃はグローバル化が良く使われているようだ。

グローバル化は国境を越えた社会や経済などの結び付きのことだ。サッカーにたとえると、国別代表チームが国際化、さまざまな国籍や地域の選手が集うクラブチームがグローバル化となる。

最近、とくに英語教育が重視されているがグローバル化と関わりがあるだろう。これもサッカーにたとえてみると、国別代表チームは共通の母語を使えば良いが、多国籍状態のクラブチームでは話者の多い英語が役立つ。

注意が必要なのは、グローバル化は国境を乗り越えはするが、均一化するものではないということだ。互いの伝統、文化などを尊重し合ってコミュニケーションを取らなければならない。そうでなければ、多国籍チームはまとまらない。

それは実際にはたやすいことではない。私たち日本人の異文化圏との関わり様について、中国文学者の高島俊男氏は「日本人にとっては、二種類の外国人がある」と述べている（『本が好き、悪口を言うのはもっと好き』ちくま文庫、２０１８年）。

「第一種外国人」は英語などを話す欧米人。「第二種外国人」はアジアや中東などの人々。

そして日本人は第一種外国人を「善良無邪気なほほえみ」で迎え、第二種外国人を「眉をしかめて見おろして」いるのだと言う。

こうしたことは今に始まったことではない。明治時代には「脱亜入欧」（遅れているアジアを離れて先進的な西欧を目指す）と日本人は言っていたのだ。

アジアと欧米をことさら区別するというのは奇妙なことだ。本来、日本人にとって欧米もアジアも異文化という点では対等である。

このような考えを先取りするようにして中国やアジアの研究に取り組んだのが１９０１（明治三四）年に上海で創立された東亜同文書院（後に大学）であり、その後身校として４６（昭和二一）年に豊橋で創立された愛知大学だ。

この連載では、愛知大学『中日大辞典』出版の歴史を軸にして、東亜同文書院と愛大の中国についての取り組みを見ていく。

第2回　濃紺の表紙と朱色の表紙

ことばを使うのに欠かせないのが辞典だ。新聞や本を読むのに国語辞典を引いたり、英語の勉強で英和辞典を引いたりする人も多いだろう。

辞典の「辞」はことば、「典」は規範のこと。世の中にあふれていることばの規範を作るというのは大変なことだ。

愛知大学（以下、愛大）は、そうした途方もない作業をして『中日大辞典』を出版した。この辞典は中国語の世界ではとても有名で、中国研究者に愛用者が多い。

１９９０年代半ば、愛大の学生だった筆者は朱色の表紙の『中日大辞典』を携えて北京に留学した。そこでは、多くの日本人留学生が愛大の辞典を使っていた。愛大生として内心、誇らしかったことを覚えている。

しかし、教室で見慣れない濃紺の表紙の『中日大辞典』を見かけることがあった。持ち主に尋ねてみると、日本語を学ぶ中国人が使っていたもので、北京の書店で売っていると言う。

早速、書店に行ってみたが、『中日大辞典』は見当たらない。店員さんに「我要一本爱知大学的中日大辞典」（愛大の辞典を１冊ください）と頼むと、翌日午後にまた来なさいと言う。言われた通りに出直し、やっと濃紺の表紙の辞典を買うことができた。

２つの『中日大辞典』を比べてみたところ、北京で買った濃紺の表紙のものは初版本、日本から持ってきた朱色の表紙のものは増訂第２版であった。

それまでは知らなかったが。愛大の『中日大辞典』を使って日本人は中国語を学び、中国人は日本語を学んでいたのだ。『中日大辞典』は日中の架け橋になっていたのである。

では、なぜそのような辞典を愛大は作ったのだろうか。それを理解するには愛大のたどってきた歴史を知る必要がある。

第３回　「荒尾精と御幡雅文と日清貿易研究所」

愛知大学の歴史をさかのぼっていくと、明治時代、中国の上海にあった日進貿易研究所にたどり着く。

設立者は名古屋生まれの荒尾精である。荒尾は陸軍将校だったが、日本の発展には国際貿易が重要であり、そのための人材養成には貿易相手国についての実践的教育が必要であると考えた。そこで、荒尾は軍人を辞めると、１８９０（明治二三）年、日本と地理的に近く、今後貿易が盛んになりそうな中国（当時は清）を専門とする日清貿易研究所を作った。

これをスパイ学校と見る向きもあるが、実際は福沢諭吉の弟子で長崎商業学校の元校長・猪飼麻次郎（いかい・あさじろう）という教育者が教頭を務めるれっきとした商業学校だった。

中国を専門とする日清貿易研究所にとって最も重要な科目は中国語である。しかし、当時の日本の中国語教育は決して盛んではなかった。日本で重視されていた外国語は、近代化に必要な科学技術を学ぶための英語やドイツ語、フランス語だった。近代化とは直接結び付かない中国語への関心は低く、中国語を専門的に教える大学レベルの学校は

ほとんどなかった。

そうした状況の中、日清貿易研究所の中国語教員・御幡雅文は、中国語の日常会話教科書「華語跬歩」（かごきほ）、ビジネス会話教科書「生意雑話」、ビジネス文書教科書「文案啓蒙」、上海方言のビジネス会話教科書「滬語便商」（こごべんしょう）など独自の中国語教材を作り、熱心に教えていた。日清貿易研究所は、当時の日本で最も進んだ中国語教育機関だったのだ。

この日清貿易研究所は資金難のために１８９３（明治二六）年に閉所してしまうが、その卒業生からは中国で起業して実業家として成功した白岩龍平や向野堅一、国宝を含む中国古美術コレクションを収集した藤井善助、大倉財閥で活躍した河野久太郎など中国と関わる多数の人材が出た。

第４回　「日清貿易研究所から東亜同文書院へ」

１８９０（明治二三）年、日本の貿易立国を目指した荒尾精は、上海に中国貿易を専門とする学校・日清貿易研究所を設立した。日本の近代的な中国語教育は始まったばかりだったが、日清貿易研究所では中国語教員・御幡雅文が独自の中国語教材を作って中国語教育を展開し、多数の中国専門家を養成した。しかし、この研究所は資金難などから短期間で閉鎖してしまった。

１９０１（明治三四）年、日中提携を目指す民間団体・東亜同文会が、上海に大学レベルの学校である東亜同文書院（以下、書院）を設立した。この時、東亜同文会会長・近衛篤麿（このえ・あつまろ、近衛文麿の父）は、院長に根津一（ねづ・はじめ）を招聘（しょうへい）した。

根津は荒尾の親友で、日進貿易研究所の運営にも関わっていたことがあった。その経験を踏まえて設立された書院は、日清貿易研究所と同じく中国貿易を専門とする学校となった。

そこでは、当然、中国語教育が重視された。その中で中心的な役割を果たしたのが真島次郎だ。０５（明治三八）年、書院を第２期生首席で卒業すると母校の中国語教員となった。

真島は卒業直後に犬養毅の中国訪問の通訳を任されるほど中国語が抜群だったが、教育者としても優れていた。

教え子の鈴木格三郎（第５期生）は「真島先生は説明するときはいつも立ったまま発音から本の言葉までいちいち親切丁寧に解明される、ことに難しい発音になると先生は学生一人一人につき発音の仕方を教えられた。先生の口つきは６０余年を経った今日なお眼にしみついておる」と回顧している。

こうした真島の教え子の中からは多くの中国語専門家が育ち、いつしか所員の日本人中国語教員のほとんどは書院卒業生となっていた。

第５回　真島次郎、鈴木択郎と「華語萃編」

愛知大学は、日中両国で評価される『中日大辞典』を作った。その成り立ちを見ていく。

佐賀県佐賀市の東泉寺には、１９６８（昭和四三）年に建てられた「真島次郎先生顕彰碑」がある。真島は愛大の前身校である上海にあった東亜同文書院に学び、卒業後は母校の教員になった。

明治、大正時代の書院生はみな真島から中国語を学んでいる。戦前、書院は中国語教育で高い評価を得ていたが、それを築き上げたのが真島だった。

そうした真島の教育活動の中で特筆すべきことは、書院独自の中国語会話教科書『華語萃編』（かごすいへん）を作ったことだ。

『華語萃編』は、さまざまな場面での会話を収録したものである。レストランや路面電車、人力車といった日常生活での会話もあれば、中国人教師との授業中のやりとりといった学校生活についての会話もある。

面白いところでは、日本式の風呂場の作り方を中国人に説明するというものがある。なぜ、このような会話が収録されているのかと言えば、当時の中国人の入浴とは身体を洗い流すだけであり、湯船に張ったお湯に漬かることは一般的ではなかったからだ。そうした中国で日本式のお風呂に入るためには、中国人に手伝ってもらいながら自分で作るしかなかった。

現代の外国語教科書は、旅行や留学、ビジネスでのやり取りといった訪問者としての立場を想定するのが普通だ。それに対して『華語萃編』は、日本式の風呂作りの会話からもわかるように、日本人が中国に根を下ろして暮らすことを考えたものだった。

また、真島は書院の中国語教員の養成に熱心だった。鈴木択郎（第１５期生、戦後は愛大教授）は、真島に「君はやはり教員がいいですよ」と言われて書院の教員になっている。他にも、松永千秋（第４期生）、富田寿男（第１３期生）など、真島はこれと見込んだ教え子を所員の中国語教員にスカウトした。

真島は２５（大正十四）年に４３歳の若さで病没されてしまったが、その中国語教育は真島の薫陶を受けた鈴木を中心にして受け継がれ、さらに発展し続けていった。

第６回　「書院カラス」は上海で北京を思う

愛知大学の前身校である上海の東亜同文書院は、中国語教育で有名だった。

書院は中国にあったのだから、中国語の学習環境に恵まれていたと思うかもしれない。しかし、実際は必ずしもそうではなかった。

井上ひさし『国語元年』は、明治時代、日本人同士でも方言が異なれば意思の疎通が難しかった様子を描いている。同じことが中国にもあった。

書院が教えた中国語は「北京語」だ。北京辺りのことばである。ところが、書院があった上海では、北京語と発音や表現の異なる方言が話されていた。ある書院生は、上海

の街中で北京語を聞いたのは、白人のキリスト教宣教師のつじ説法だけだったと言っている。書院の北京語は上海では誰も使っていなかったのだ。

上海方言のただ中で、書院生はどのように北京語を学んだのだろうか。

現在の中国語学習は、拼音（ピンイン。発音をあらわす中国式ローマ字つづり）を覚えながら発音を習得し、さらに文法を学び、わからないことばや表現は辞書を引いて理解する。

しかし、１９５０年代までの日本の一般的な中国語学習は、教員の見よう見まねで発音を覚え、後は教材の文章をひたすら暗唱するものだった。師匠の噺（はなし）を聞いてまねをする落語の稽古のようなものだ。

書院生は、そうした授業のほかに「念書」と呼ばれる自主学習会を開いて中国語学習に励んだ。そうして、毎日、書院の校庭には数百人の書院生による中国語が響き渡ったのだった。

それを近所の住人たちは「書院カラス」と呼んだそうだ。カラスの鳴き声はうるさがられるものである。書院カラスということばは、書院生がうるさいほど熱心に中国語を練習していただことを物語っている。

第７回　東亜同文書院の中国語教育

愛知大学の前身は、戦前、上海にあった東亜同文書院だ。書院は中国語教育で有名だった。授業は日本人と中国人の教員が必ずペアを組んで行い、課外では「念書」と呼ばれる学生の自主学習会が毎日開かれた。

そうして中国語を学んだ書院卒業生は、中国関係の商社マン、新聞記者、外交官、教育者などとして、戦前だけではなく戦後も活躍した。

書院の中国語教育が成果を上げたのは、書院生と教員の熱心さに加えて、さらに具体的な目標があったことが大きい。それが「大旅行」だ。

大旅行とは、書院生が中国各地を２～３か月かけてフィールドワークすることである。当時の中国は交通の便が良くなく、政情は不安定で治安の心配もあった。そうした中で大旅行するために、書院生はどうしても中国語を習得しなければならなかった。

この大旅行で、書院生は、多くの中国人と直接交流することを通して、より高度な中国語のコミュニケーション能力を身に着けた。

このように中国の人々と密着した書院の中国語教育は、語学の上達にとどまらず、中国人との間に信頼関係を築く素養を培わせた。

真島次郎（第２期生・書院教授）は、人の言動に中国人差別を感じ取ると「中国人を見下してはいないか、もしそうだとしたらとんでもないことだ」と諭した。

坂本義孝（第１期生・書院教授）は、息子に「自分の居るべきところは中国だ」と言った。

石射猪太郎（第５期生・外交官）は、息子に「友人を持つなら中国の友」と言った。

書院で学んだ人たちは、心から中国に親しんでいたのだ。

第８回　教科書の次は辞典をつくろう

愛知大学の前身である上海にあった東亜同文書院は、戦前、中国語教育で有名だった。しかし、そこには問題もあった。

坂本一郎（第２０期生、卒業後は書院教授）は、卒業直後の自らの中国語の語学力について「聞くことと話すことと読むことには一応自信があったが、語学的に考えてみるとわからぬことばかり」と言っている。

聞く、話す、読むができるのにわからないというのは不思議に思えるかもしれない。それはこういうことだ。例えば、日本人だからといって誰もが外国人に日本語を教える事が出来るだろうか。日本語教育のトレーニングを受けなければ難しい。話せることと語学的に理解することは違うのだ。

明治、大正の頃、書院の中国語教育は、発音は教員や先輩の見よう見まね、話す・読む・書くについては、教科書をひたすら暗記させるというものだった。そうして書院生は実用的な中国語の表現をたくさん身につけたものの、一方で文法的な理解には欠いていた。

これは書院だけのことではない。戦前日本の中国語教育とは、そうしたものだったのだ。そのため辞典の必要性は高くなく、辞典と言っても詳しい説明もない単語集のようなものばかりだった。

そうした中、１９３３（昭和八）年、書院は鈴木択郎をリーダーに、本格的な中国語辞典の編纂（へんさん）を始める。このことは、書院の中国語教育が教材の丸暗記から変化し始めたことを意味する。

書院は中国語の教育経験を蓄積させていく中で、辞典を引きつつ中国語の仕組みを考えて理解する中国語教育を実現させようとしていたのだ。

第９回　書院生とラブレター

愛知大学の前身である上海の東亜同文書院を、日本の中国侵略のためのスパイ学校だったとする見方がある。もちろん誤解だ。実際の書院は中国貿易に特化した商学系の高等教育機関だった。

しかし、日本の学校である以上、日本の戦争の影響を受けざるをえなかった。

日本の学生と戦争の直接的な関りは、１９４３（昭和十八）年から行われた学徒出陣が知られている。しかし、それ以前に書院生が戦場に動員されていたことはあまり知られてない。

３７（昭和十二）年７月、北京郊外の盧溝橋で勃発した日中戦争の戦火は、８月には書院のある上海にも飛び火した。この時、８０名の書院生が通訳として従軍し、１名の戦死者を出している。

こうした戦争の最中にあっても、書院生の中国への親しみが失われることはなかった。

島田孝夫（第３４期生）は、通訳従軍中に日本軍兵士に乱暴された中国人の女学生を助けている。

「我不是兵。我是東亜同文書院的学生」（私は兵士ではない。私は東亜同文書院の学生です）と島田さんは言い、彼女を中国人だちが戦禍を避けて隠れている山中まで送り届けた。交戦相手国の人々の中にたった一人、丸腰で立ち入るというのは命がけだ。しかし、島田さんが危険な目に遭うことはなかった。誠意が中国人に伝わったのだ。

この話には後日談がある。

島田さんのものに助けた女学生からラブレターが届くようになったのだ。２人のやり取りは３年ほど続いたが、結局、戦争によって引き裂かれてしまった。しかし、島田さんは、彼女からの手紙を終生大切に持ち続けていたそうである。２人の気持ちは通じ合っていたに違いない。

第１０回　東亜同文書院と本間喜一、愛知大学

１９３９（昭和十四）年、上海の東亜同文書院は旧制大学の認可を受けた。それまで商業実務教育中心だったが、この昇格によって、より高度な学術機関であることが求められるようになった（旧制大学は１９４７年以前の学校制度）。

そこで書院に招かれたのが本間喜一だ。本間は東京帝国大学法科大学法律学科（現・東京大学法学部）を卒業すると、検事、判事を経て、東京商科大学（現・一橋大学）や法政大学の教授として民法や商法の教育・研究を行い、弁護士としても活躍した。方角の実務・教育・研究を行い、弁護士としても活動した。法学の実務・教育・研究の全てに通じている本間は、旧制大学に昇格したばかりの書院にとってうってつけの人物だった。

本間は書院に赴任すると、優秀な教員を集めるなどして、たちまち旧制大学としての教育体制を整えている。

ところが戦争が激化し、書院生にも学徒出陣が強いられるようになった。

本間は出征する書院生に「必ず生きて帰ってもらわねばならない」と呼びかけた。これは書院生を深く感動させた。国のために命をささげるのが当然とされていた当時、この言葉は異例だったのだ。

４５（昭和二十）年、日本が敗戦すると書院は廃校となり、戦場から帰ってきた書院生は行き場を失ってしまった。

そうした教え子のために、本間は新大学設立に動いた。これに協力したのが東三河の人々だ。戦災を受けていたにもかかわらず、豊橋市は補助金を支給し、中部瓦斯（現・サーラエナジー）社長神野太郎をはじめとする地域の人々も熱心に支援した。

このようにして、４６（昭和二一）年に開港したのが愛知大学だ。この大学は、教え子を思う本間と東三河の人々の教育が一つとなって出発したものなのだ。

第１１回　高師原に鳴く書院カラス

戦前、中国語教育で有名だった上海の東亜同文書院大学は、日本が敗戦すると中国で存続できなくなった。

書院の学長だった本間喜一先生は、母校を失った教え子のために新大学設立運動を起こし、東三河の人々の協力を得て、１９４６（昭和二一）年、豊橋郊外の高師原に愛知大学を開講した。

愛大は「世界文化ト平和ニ寄与スヘキ新日本ノ建設」（『愛知大学設立趣意書』）を担う国際的教養と視野を持つ人間の育成を目指し、「国際」、「アジア」、「地域」を重視する教育・研究を掲げた。

大都市にしか大学がなかった当時、地方都市から世界を目指す教育を興そうというのは大きな挑戦であった。それは現代社会で注目されているグローカルな姿勢（グローバルな視野に立ちつつ、同時にローカルの視点からさまざまな問題の解決を目指す）に通じる先進的なものだった。

愛大はアジア、特に中国を重視した。それは前身校である所員の伝統を継承したことにほかならない。

中国に関する教育・研究の基礎となる中国語教育では、書院の中国語教員だった鈴木択郎、桑島信一、池上貞一、内山雅夫が教壇に立ち、書院独自の中国語教科書『華語萃編』（かごすいへん）を使って教えた。

書院の雰囲気は学生にもあった。書院からやって来た学生が、書院時代と同じように自主的中国語学習会「念書」を開いたのだ。

こうして高師原の愛大キャンパスには、かつて上海市民が「書院カラス」と呼んだ書院流の中国語発音練習の声が響きわたるようになった。それは後輩たちに引き継がれ、愛大の伝統となっていった。

第１２回　本間喜一の東奔西走

敗戦によって閉校した東亜同文書院大学の学長だった本間喜一は、１９４６（昭和二一）年、「世界文化ト平和ニ寄与スヘキ新日本ノ建設」（『愛知大学設立趣意書』）を担う国際的教養と視野を持つ人間の育成を目指して愛知大学を開学した。

この時、本間は大学運営に豊富な経験を持つ慶応義塾大学の元塾長・林毅陸（はやしきろく）を初代学長に招き、自らは一教員として愛大を支えようとした。

しかし、翌年、本間は愛大を離れている。最高裁判所長官・三淵忠彦たっての願いで最高裁事務総長に就任したのだ。

三淵は本間の裁判官時代の上司である。２人の関係は師弟といえるもので、三淵の強い要請を本間は断ることができなかった。

５０（昭和二五）年、最高裁の運営を軌道に乗せた本間は愛大に戻った。この時、三淵の後任の最高裁長官・田中耕太郎（本間の一高、東大以来の友人）が豊橋までやって

来て、本間に最高裁事務総長への再登板を懇請している。

それを本間は固辞した。当時、愛大は深刻な財政難に直面しており、加えて林学長の体調が悪化していた。危機にひんした愛大のかじ取りができるのは本間以外にいなかったのである。

本間は愛大の学長になると、大学院や女子短大の設置、名古屋校舎（現・車道キャンパス）の拡充など現在に至る愛大の骨格を整えていった。そうした活動の中でも特筆すべきものが『中日大辞典』の編纂である。

第１３回　受け継がれた中国語辞典作り

愛知大学の前身校である上海の東亜同文書院大学は、鈴木択郎（戦後、愛大教授）をリーダーに中国語辞典を編纂していた。しかし、敗戦によって書院は閉校し、それまでに作成していた約１４万枚の中国語語彙（ごい）カードは中国に接収されてしまった。

本間喜一は、１９５０（昭和二五）年、愛大の学長に就任すると、すぐに書院の中国語語彙カードの返還運動を始めた。本間は、書院の中国語辞典編纂（へんさん）を、愛大で完成させようと考えていたのだ。

当時、日中間には国交がなかったが、中国科学院院長・郭沫若の協力も得て、５４（昭和二九）年、中国語語彙カードが戻ってくることになった。敗戦で接収されたものが戻ってくるというのは異例のことだった。

こうして中国語語彙カードを受け取った愛大は、５５（昭和三〇）年、華日辞典編纂処（現・中日大辞典編纂室）を設け、鈴木を編纂委員長として中国語辞典の編纂を始めた。スタッフは、書院出身の教員。内山雅夫と桑島信一、中国から招聘（しょうへい）した張禄沢と欧陽可亮、愛大卒業生の今泉潤太郎である。加えて、学外の書院卒業生や中国専門家の協力も得ながら辞典編纂が進められていった。時には愛大生も手伝った。

当初、6年間での完成を見込んでいたが、実際に『中日大辞典』として出版することができたのは、その倍以上の時間を費やした６８（昭和四三）年のことだった。

今泉は、「大学の授業以外の時間はほとんど辞典作りをしていた」、「授業のない土日でも辞典編纂処に行くことが普通だった」と語っている。そのような作業を続けても、なかなか完成させることができないほど辞典の編纂は困難なことだった。

第１４回　難航する編纂

１９５５（昭和三〇）年、愛知大学は中国語辞典の編纂（へんさん）を始めた。

この取り組みは国際的な注目を集め、中国やアメリカの学者がたびたび視察にやって来た。彼らの評価は高く、５６（昭和三一）年には中国から辞典編纂資料が寄贈され、５７（昭和三二）年にはアメリカの慈善団体ロックフェラー財団が支援を申し出た。

国内外から期待を寄せられた愛大の中国語辞典だったが、当初見込んだ6年間を過ぎても完成しなかった。

辞典を作るというのは、変化し続けることばを集めて説明しようとする途方もない企てだ。例えば、『広辞苑』の初版は編纂に２０年余りを費やしている。

愛大は、最初、東亜同文書院大学が戦前に作成した約１４万枚の中国語語彙（ごい）カードをもとに辞典を作ろうと考えていた。しかし、うまくいかなかった。戦前と戦後では中国語が変わってしまっていたからだ。

漢字の変化。戦前は日中両国で同じ形の漢字が使われていたが、戦後はそれぞれ変化した。例えば、戦前は日中共に「豐橋」と書いていたのが、戦後は日本では「豊橋」、中国では「丰桥」と書くようになった。

発音表記の変化。戦前はローマ字表記の「ウェード式」、あるいは発音記号「注音字母」が使われていた。それが、戦後になると「拼音」（ピンイン）というローマ字表記が使われるようになった。例えば「北京」の中国語音は、ウェード式では「Pei3ching1」、注音字母では「ㄅㄟˇㄐㄧㄥ」、拼音では「běijīng」と表わす。

さらに、使われなくなったことばもあれば、たくさんの新語も生じていた。

こうした変化を反映させるための作業を続けた結果、中国語語彙カードはいつしか書院の時の倍以上、実に約３０万枚に増えていた。

第１５回　本間元学長、再び走る

戦前、上海にあった東亜同文書院大学は、当時の日本にはなかった本格的な中国語辞典を編纂（へんさん）していたが、戦争によって未完に終わった。

敗戦時の書院学長・本間喜一は、戦後、愛知大学を開校させると、１９５５（昭和３０）年、書院の中国語辞典編纂を愛大で再開させた。

中国語の大きな変化もあって、編纂はなかなか進まなかったが、６４（昭和三九）年頃になると、ようやく完成のめどがつくようになった。

しかし、出版費の調達がさらなる問題となった。

愛大の中国語辞典の出版では、日本にはなかった約3千字もの「簡体字」（中国語の漢字の字体）の活字を作る必要があり、当時の金額で１５００万円以上という出版費が見込まれた（厚生労働省「賃金構造基本統計調査」によれば６８年大卒初任給は月給３万６００円）。

その金額を愛大が出すことは難しかった。辞典を推進した本間は、すでに愛大の学長職を降りており、愛大は以前ほど辞典に対して積極的ではなくなっていたのだ。編纂委員長・鈴木択郎は「愛知大学の内部でさえも、この辞典については認識が浅く、出版費の大学負担はたやすくは決定されなかった」と述べている。

この局面を打開したのは、やはり本間だった。本間は学内外宏邦粘り強く協力を呼びかけた。その結果、愛大はもちろん、図書印刷株式会社、日本通運、朝日新聞、毎日新聞、多数の中国関係の商社、中国書専門店の大安などからの支援が寄せられることになったのだ。

こうして、６８（昭和四三）年、愛大の『中日大辞典』が出版された。愛大が編纂を始めてから１３年、書院の辞典編纂開始からは３５年もの年月が過ぎていた。

最終回　日中をつないだ辞典

愛知大学の「中日大辞典」の出版では、チャリティーの手法も用いられた。日中友好を目指して中国に贈呈する分の予約購入を広く募ったのだ。

１９６８（昭和四三）年、「中日大辞典」が出版された。日本では大好評であったが、中国での反応はすぐにはわからなかった。当時、中国は文化大革命の混乱の最中にあった。

７２（昭和四七）年、日中国交正常化がなされる。その翌年、突然、中国の有力大学・南開大学から愛大に招待電報が届いた。「中日大辞典」に関する学術交流の呼びかけだった。

愛大はすぐに辞典の編纂（へんさん）委員長・鈴木拓郎を団長とし、中国関係の教員・池上貞一、今泉潤太郎、中島敏夫からなる訪中団を派遣した。

交流会の席上、中国の研究者たちは、「中日大辞典」は日本人の中国語学習だけではなく、中国人の日本語学習にも役立つもので、両国の文化交流を促進させるものだと評価した。さらに、辞典について２００余りもの提言を寄せてきた。これは「中日大辞典」を詳しく研究していなければできないことだ。やはり、中国の「中日大辞典」への関心は高かったのである。

この学術交流をきっかけとして、愛大は南開大学をはじめとする中国の大学との関係を深めていった。

そして、「中日大辞典」は、中国の研究者たちが予想したように、中国両国の人々が互いのことばを学ぶのに大いに用いられ、両国の交流に貢献し続けた。

現在、紙の本としての「中日大辞典」の編纂は終了している。しかし、その内容はインターネット上の「愛知大学中国語彙（ごい）データベース」で公開されており、今なお両国交流の一翼を担い続けている。

〔注〕東海日日新聞　令和四年三月～六月毎週火曜日掲載。